

【課題】

「平家物語」には、和歌にかかわる**忠度都落**ただのりのみやとおちという有名な話があります。「百人一首」の歌人たちの人柄や、歌の背景を知ると、より深く和歌を味わうことができます。学習コンテンツ「百人一首の世界」を活用して、あなたの好きな歌について紹介しましょう。

「平家物語」と和歌（「平家物語」巻第七から『忠度都落』）

薩摩守忠度はどこから帰られたのであろうか、侍五騎、童一人、それに自分を含め七騎で引き返し、五条の三位俊成卿の屋敷を訪ねてみると、門を閉ざして開かない。

「忠度です。」

と名乗られると

「落人が帰って来た。」

と言ひ、そのうち騒ぎになった。薩摩守が馬から降り、大声で言われるには、

「特別の理由があるわけではありません。三位殿（俊成）に申し伝えたいことがあって、忠度が戻って参りました。門を開けらなくてもよい、近くまで来ていただきたい。」

と言われると、俊成卿は

「来られる事情がおりなのだろう。その人ならば問題ない。門を開けて、入れてさしあげろ。」

と門を開けて対面した。様子がなんとなく哀れであった。薩摩守は、

「ここ何年もの間、歌のことについてご指導願ひ、お教えいただいて後、決しておろそかにしておりませんでした。この二・三年は京での騒ぎや、各地での動乱など、すべてわが平家の身の上のことでございますので、歌道をなおざりに思っていたわけではないものの、なかなか参ることができませんでした。わが君（安徳天皇）はすでに都を出られました。平家一門の運命も、もう尽き果てたようです。勅撰集の編纂があるとの話をうかがいまして、生涯の名誉に一首でもご恩をこうむり、入れていただこうと考えておりましたのに、すぐに世は乱れてしまい、編纂も中止となったことは、私にとって本当に大きな嘆きです。この後、世が鎮まって勅撰集の編纂が行われることもございましょう。ここにある巻物の中にふさわしい歌があれば、一首なりとも推選いただいて、草場の陰でうれしく思うことがありますならば、あの世から末長くあなたをお守りしたいと存じます。」

と、いざ出陣しゅつじんというときのために持っていた、日頃詠まれた歌の中から秀歌しゅうかと思われる百余首ほどを書き集められた巻物を、鎧よろいの合わせ目から取り出して、俊成卿に手渡した。

俊成卿はこれを開けて見て

「このような忘れ形見わすれがたみをいただいたうへは、決して粗末にはあつかいません。それにしても、ただいまこのようにお越しこいただいたのは、風情ふせいも非常に深く、しみじみとした思いが感じられて、涙をおさえきれません。」

と言われると、薩摩守は喜んで、

「もはや西海さいかいの底に沈むなら沈んでもよい、骸むくろを山野さんやにさらすことになっても、もうこの世に何も思に残すことはありません。では、お別れを申します。」

と、馬にうち乗り、甲かぶとの緒おをしめ、西に向かつて馬を歩ませられた。俊成卿が後ろ姿をはるかに見送って立っていると、忠度と思われる声で、

「前途程遠ぜんとほどとおし、思いを雁山がんざんの夕ゆうの雲に馳はす」

【これから先の道のりは遠い、思いはこれから越える雁山の夕方の雲に飛んでいる】

と高らかに口ずさまれたので、俊成卿はますます名残惜なごりおしく思われ、涙をこらえて戻られた。

その後、世が鎮しずまって、千載集せんざいしゅうを選ばれることになったとき、ありし日の忠度の姿や言い残していった言葉などが、今あらためて思い出されてもの悲しく、あの巻物の中には、入集にふさわしい歌がいくつもあつたが、忠度は帝みかどに勘当かんどうされた身なので、名前をのせられず、故郷こきやうの花という題で詠まれた歌一首だけを、「詠み人知らず」として入れられた。

さざ浪なみや志賀しがの都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな

【志賀の旧都は荒れてしまったが、長等山ながらやまの山桜は昔そのままだなあ】

その身が朝敵ちようてきとなつてしまったからには、とやかく言えないが、悲しく残念なことであつた。

- ・薩摩守忠度：平忠盛の六男。平清盛の異母弟。武芸だけでなく、歌人としても優れていました。一ノ谷の戦いで討死しましたが、その籓（えびら）には歌が結び付けられていたといえます。
- ・藤原俊成：藤原定家の父。後白河院の命による「千載和歌集」の撰者。五条京極に邸宅がありました。俊成は「百人一首」83番の歌人です。
- ・「千載和歌集」：成立は文治三年（一一八七）。忠度の歌は春上に「故郷花といへる心を詠み侍りける」と詞書があります。なお「新勅撰和歌集」以降は薩摩守忠度の名で歌が選ばれました。
- ・志賀：滋賀県にある琵琶湖南部西岸。長等山は琵琶湖西岸の山。